

## 新型コロナウイルス感染症対策に伴う 保育実習学内プログラムの作成と課題

堀 由里 小嶋 玲子 野口 啓子 金子 晃之

The Making and its Issues of an On-Campus Nursery Practice Program Set  
against COVID-19

Yuri HORI, Reiko OJIMA, Keiko NOGUCHI and Teruyuki KANEKO

### 問題の所在

2019年冬より新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）が広がり、日本においても2020年に入り感染が拡大してきた。そのような状況の中、高等教育を提供する体制そのものも大きな影響を受けた。学内における通常の授業は、遠隔授業と対面（面接）授業の併用が推奨され、対面（面接）授業においても集団感染のリスク対応として、換気の徹底（密閉の回避）、身体的距離の確保（密集の回避）、マスクの着用（密接場面への対応）などが行われるようになった。

一方、学外における授業も大きな影響を受けている。医学部においては病院実習が中止になり（木内・佐橋、2020）、看護の臨地実習でも特に高齢者施設におけるものは従来型での実施は危ぶまれると判断されていた（原井・貝谷、2020）。保育や幼児教育の分野においても、現場で実習を行うことに対して懸念が続いていた。そのような中、令和2年3月2日付で「実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと」という通知が厚生労働省（2020a）より各保育者養成校に届いた。

筆者らの勤務する養成校では、最終学年の6月に保育実習Ⅱが配置され、年度を越えて実習実施ができず、また県内には多数の養成校があり、年度内に履修学生全員に実習先を確保することができないという状況であった。一方で実習先となる保育所では、厚生労働省（2020b）からの連絡に則り、なるべく登園を控えるように保護者に依頼し、保育の提供を縮小する状況もみられた。そのような中で「9月までは実習を見合わせてほしい」、「今年は実習を遠慮していただきたい」等、いくつかの保育所を管轄する市町の役所（保育課）から4月初めに連絡を受けた。このような状況を鑑み、①教育の公平性に配慮すること（現場での実習ができる学生

とできない学生がでる不平等さを解消すること)、②地域の保育を守る(乳幼児の感染増加の現状、実習実施による乳幼児・保育者・学生間の感染リスクの高まり、部外者の園への来訪による不安の高まり、現場では感染防止への配慮が通常以上の煩雑さであるため実習指導への負担が倍増すると予想されること)、③地域の医療崩壊への配慮、という観点から、本校では現場での実習を中止し、学内でのプログラムを実施することを決定した。

## 学内プログラムの内容の検討

### (i) 作成プロセス

学内プログラムの内容は、3月2日の通知を受け4月に選定し、その後6月15日の通知(厚生労働省、2020c)に対応するため7月以降も内容の追加・修正を行った。

実習は本来、約10日間で2単位であるが、学内プログラムでも同様の2単位を付与するため、少なくとも60時間分の実習時間(学内補完)を確保する必要性が出てきた。そこで、体験することを主眼においた「実習」内容として1単位(授業回数15回;30時間、事前事後学習15時間)と、発表や議論することを主眼においた「演習」内容として1単位(授業回数15回;時間30時間、事前事後学習15時間)の計30回の授業を構成した。また、COVID-19の収束や自粛期間終了後には、現場での自主実習を推奨することを学生には伝えた。プログラムは2020年6月から10月まで30コマ実施し、事前指導を4月から6コマ、事後指導を11月に2コマ実施した。

### (ii) プログラムの内容と方法

本来、保育実習は養成校で学んできた知識や技術を乳幼児や保育者との具体的な関わりを通して体験から学ぶものである。更に、保育実習Ⅱは、保育実習Ⅰで明確になった課題を意識したうえで、より主体的に保育に関わり、子どもや保護者に対する理解を更に深め、保育や援助の方法と内容について実践を通して学ぶという目的がある(全国保育士養成協議会、2018)。そこでプログラム内容は、厚生労働省の「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」における保育実習Ⅱの目標(厚生労働省、2018)に対応させることができるように、心理学を専門とする教員2名、教育学を専門とする教員1名、園長職を含む40年の保育現場経験のある教員1名の4名でプログラム内容を協議した。

保育実習Ⅱの目標は6つ掲げられており、1つめは「保育所の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める。」である。保育所保育指針(厚生労働省、2017)の総則には、「入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない。」また「子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている。」ということが保育所の役割として明示されている。これらを理解・修得するためには、子ども一人ひとりの最善の利益を考慮する必要があること、養護と教育の一体化を具体的な場面から考えることが求められると判

断した。「気になる子」が保育現場に多数在籍していること（郷間・郷間・川越、2007；丸山、2008）を考えると、気になる子一人ひとりの最善の利益を考えていくことの必要性がでてくる。そこで、発達の遅れや偏りに限らず、外国籍児や愛着の問題を呈する幼児、貧困家庭の幼児など、学生がこれまでの実習やボランティアで出会った「気になる子」について討議を行うこととした。また、「養護と教育の一体化」について、写真を提示しながら事例検討を行い、保育者の意図を考え、討議を行うこととした。

2つめの目標「子どもの観察や関わりの視点を明確にすることを通して保育の理解を深める。」に関しては、実際の子どもの様子を見るのが一番の学修であると考えた。現場に行くことができないため、保育園を管轄する役所の許可のもと、実際の保育園での「朝の受け入れ」や「自由遊び」等の様子を撮影させていただき、それを学生が視聴して「観察と記録」を行った。映像での観察は、非参与観察であり、状況に応じて重要な行動を選択的に観察するなど柔軟な対応ができないという限界点がある。更にビデオによる間接的方法のため、音声の聞き分けが困難で、視野も一定であるというデメリットがある。しかし、従来型の現場実習では、学生が担当するクラスに入るため、決まった年齢を観察するにとどまってしまう。そこで映像であるメリットを活かし、同じ場面（朝の受け入れ等）でも、学年が異なると子どもの動きや保育者の働きかけが異なることが理解できるよう、0歳児クラスの様子、1歳児クラスの様子、と全ての年齢を取り上げて、比較検討できるようにした。また、現場実習では時期が違えば体験することができない子どもの様子や保育者の関わりを理解するため、「避難訓練」の様子を取り上げた。2011年に発生した東日本大震災を経て、安全や防災の必要性に対する社会的意識が高まり、平時からの備えや危機管理体制づくり等を行政機関や地域の関係機関と連携しながら進めることが求められている。改定された保育所保育指針（厚生労働省、2017）にも、災害への備えについての記載が加えられたこともあり、訓練そのものを学修内容として取り上げた。保育園での避難訓練時の写真を見て保育者の連携について考えたり、避難リュックの中身について討議を行ったりした。

3つめの目標「既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び子育て支援について総合的に理解する。」に関しては、感染症対策や子育て支援を取り上げた。改定された保育所保育指針（厚生労働省、2017）でも感染症対策について記載が充実され、今般のCOVID-19のように手探りで対応を考えなければいけないことについても当事者意識を持てるようにディスカッションを行った。「子育て支援」に関しても改定された保育所保育指針（厚生労働省、2017）において、「保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるように努める」ことが明記されたことを意識し、子育てにおける不安を口にする保護者との対話等をロールプレイから考えた。現場実習では送迎時に挨拶をする、保育者が保護者と話しているところを垣間見る程度の学びにしかなくなってないなど、保育所実習では保護者と直接関わるものがほとんどないという学生が多いため（竹之下・馬見塚、2016；榊原・小川・杉山、2018）、本研究ではより具体的場面をとりあげるようにした。また、子どもの保育に関して、現在ほとんどの幼稚園や保育園で活用されている紙芝居（鬢櫛・野崎、2010）を自作し、披露すること

とした。小島・鬢櫛・高瀬（2013）は保育経験年数が16年以上の保育者は、紙芝居をオリジナルな教材・教具として活用しており、保育経験年数が多くなるほど、紙芝居の特性を活かして保育の中で意図的に紙芝居を活用していることを明らかにしている。また養成課程段階の学生にとっては、紙芝居を有効に活用することが難しいかもしれないが、取り組んでみることに意義があると考えた。

4つめの目標「保育の計画・実践・観察・記録及び自己評価等について実際に取り組み、理解を深める。」に関しては、「指導案作成と教材準備」、「模擬保育の練習と実践」、「模擬保育後の意見交換」を取り上げた。模擬保育は、座学だけでは得られない保育者の援助や保育内容に関する気づきが得られる。一方、現場経験が不十分な状態で実施することは、実際に子どもの状況に即した効果が得にくいこと（中田・柳瀬・渡邊、2014）、保育実践に対する基礎的認識が不十分なまま模擬保育を行うと「保育者アイデンティティ」の拡散を助長する可能性がある（田爪・小泉、2006）などの指摘がある。このように模擬保育の適時性については、多々検討されてきた。本研究参加者は養成課程の最終学年であり、既に2週間の保育所実習および4週間の幼稚園実習を経験しているため、模擬保育を体験する時期としては適していると考えた。

5つめの目標「保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。」に関しては、「保育士倫理綱領」や「人権」について資料から具体的場面・状況を思い出し、保育者としての対応を検討することとした。これまで、現場実習を経験した学生を対象に、園からの評価をもとに個別面談をしてきた。その中で、この項目の評定に関し、学生からは「よく分からない」という声をたくさん聞いた。一般社団法人全国保育士養成協議会（2017）の調査研究報告書によれば、「理解が難しかった」と実習生に捉えられた項目の中に「保育士の職業倫理」があげられていた。奥・浅香・八田・音田（2020）は、実習園からの評価において「職業倫理」の項目は、実習先の保育士がどのような観点で評価を行うのか、そこが明確になっていないため各実習先で評価にばらつきが生じていると考えている。つまり、現場に実習に行くことができて、学生は自身のどのような言動から評価を受けているのかが自覚できないまま評価されていることになっている可能性がある。自覚できていない状況では改善に繋ぐ省察はしにくい。そこで職業倫理が行動指標として使われている実際の保育場面を考えるという、現場とは逆のアプローチをして理解を促進した。また、子どもを尊重する保育という観点から、保育現場で起こってしまいそうなよくない事例から人権について考えた。

6つめの目標「実習における自己の課題を明確化する。」に関しては、体験に主眼をおいた実習内容としての模擬保育を実施した後、「模擬保育の振り返り」を行った。

実際に行った内容を表1に示す。

表1 学内プログラムの内容

回	内容	対応目標					
		役割・機能	観察や関わりの視点	保育や子育て支援	計画・実践	倫理	自己課題
1	養護と教育の一体化の事例検討（討議）	●					
2	感染症について調べ学習の成果発表			●			
3	気になる子について討議①	●					
4	気になる子について討議②	●					
5	避難訓練（行事と日常の対応）について討議		●				
6	子育て支援についてロールプレイ			●			
7	倫理について調べ学習の成果発表					●	
8	人権について調べ学習の成果発表					●	
9	映像から記録をとる（朝の受け入れ）		●				
10	模擬保育実践①				●		
11	模擬保育実践②				●		
12	模擬保育についての意見交換①				●		
13	映像から記録をとる（自由遊び）		●				
14	模擬保育実践③				●		
15	模擬保育実践④				●		
16	模擬保育についての意見交換②				●		
17	映像から記録をとる（給食）		●				
18	模擬保育実践⑤				●		
19	模擬保育実践⑥				●		
20	模擬保育についての意見交換③				●		
21	映像から記録をとる（午睡）		●				
22	模擬保育実践⑦				●		
23	模擬保育実践⑧				●		
24	模擬保育についての意見交換④				●		
25	映像から記録をとる（乳児との関わり）		●				
26	模擬保育反省会①						●
27	模擬保育反省会②						●
28	模擬保育についてのまとめ						●
29	自作の紙芝居披露①			●			
30	自作の紙芝居披露②			●			

プログラム内容に対応する目標は多岐にわたるが、主たるものに●を記してある

### (iii) 本プログラムの独自性

模擬保育は、グループ活動として行い、時間は15-20分というのが一般的とされている（阿部、2016）。しかし、一般的な授業とは異なり、実習の代替プログラムの一環であること、4年生という最終学年であることを踏まえると、少なくとも30分程度の個人の責任実習の代替となるような模擬保育が必要と考えた。そこで、160名の学生を1グループ16名ずつに分け10グループ作り、一人で保育者役を30分行うことを必須とした。所属するグループは16名いるため、15回子ども役で活動に参加する形態をとった（1コマ内に2回模擬保育を実施し、全8コマ

模擬保育にあてた)。グループは、気心知れたメンバーや教員の前での実施ではなく、ある程度の緊張感をもって取り組めるように、受講クラスとは別編成をしたグループで模擬保育を行った。保育内容は造形・音楽・身体表現およびオリジナルの紙芝居を用いたものという大枠から各自が自由に計画をたてるように指導した。その際、実施する年齢として3歳以上児のクラスを対象とした保育を実践するように設定した。なぜなら3歳未満児クラスでは、複数の保育者が連携しながら保育を行うため、今回のような1人保育者という状況では、未満児クラスの保育者の連携を模擬保育としても実践できないと判断したためである。また、子ども役が機能するために、事前に子ども役設定シート(年齢別に演じる子どもの性格、他者との関わりの様子、興味関心のあること、器用さ等の情報)を課題とした。

COVID-19により学内の授業において遠隔(リモート)が用いられるようになった。準備したプログラムは、事前学習をもとにしたディスカッションなど、遠隔授業になった場合にも対応できる内容である。一方で、目標4の内容である模擬保育は、対面授業であることが前提とされたものである。模擬保育は夏季休業中の集中講義として実施予定であったが、お盆による国内移動者の増加や県内の非常事態宣言等、COVID-19感染拡大および学内入構禁止等の措置が懸念されたため、実施1ヶ月前に「対面による模擬保育」から大学が推奨するMicrosoft Teamsによる「リモート模擬保育」に切り替えることとした。

COVID-19を機に、2020年春以降「オンライン保育」を実践している保育施設も出てきている(ベネッセ教育総合研究所、2020)。これまでのような身体的にも密になる保育、直接体験をもとにした気持ちの共有などが重視される保育とは異なる新たな時代の保育が創造され始めている過渡期に、学生最後の年の挑戦としてリモートでの模擬保育に取り組んでもらった。ただ、「オンライン保育」としての取り組みは、指導する教員も未知の部分があるため、「オンライン保育」を実施するのではなく、あくまで対面で行おうとしていた模擬保育がリモートになっただけ、という想定で行った。学生はこれまでオンデマンド配信で授業を受けること、teamsやzoomを活用してゼミ活動することなど、少しずつパソコンを介した活動に慣れ始めていた時期である。しかし、模擬保育をリモートでするということを想像することも難しいようであった。そこで、学生からの不安の声を一つひとつ丁寧に取り上げ、全受講者が共有できるように、助言集を作成したり(例えば、「teamsは最大9人までしか映らないが、1グループは16人いる」という質問に対し、「画面にでていない子ども役の学生には、名前を呼んでやり取りをしてみましょう」と回答)、事前に教員がリモートで模擬保育をする様子を映像で見せたりなど、学生の混乱を招かないように事前準備を整えた。

また、現場実習では保育所側からの評価をもとに、学生は省察を行う。授業の評価権者である学内の教員が学生の模擬保育を評価するだけでは緊張感なく進んでしまうととも、新たな視点を獲得しにくいと考えた。そこで、併設する大学院のOGなど保育現場経験の長いベテランの現役・元保育者17名(保育者歴平均36年)に協力を仰ぎ、学生の模擬保育にコメンテーターとして参観するという形式をとった。

## 学内プログラムを受講した学生の意識

A県内の保育者養成私立大学4年生で保育実習Ⅱを受講する161名（全員女性、平均21.5歳）を対象に事後指導後（2020年11月）に自記式質問紙を実施した。調査内容は、「学内プログラムの中で、特に勉強してよかったと思うものを3つ選ぶ」であり、4つ以上回答した学生をのぞいた106名を分析対象とした（有効回答率65.8%）。尚、研究実施にあたり、学内の研究倫理審査委員会の承認を得ており、研究参加者である学生には、研究内容の説明および同意を口頭・調査用紙上で行った。

調査結果を表2に示す。一人3つ選択するため、総計318件であった。全ての項目において反応があり、学生にとってどのプログラムも有意義であったことが読み取れる。特に模擬保育に関連する項目「リモートとはいえ模擬保育をしたこと」、「友達の（模擬）保育に参加したこと」、「現場の先生方に模擬保育のコメントをいただいたこと」、「子役を何回もやってみたこと」、「指導案や教材を作成したこと」は、いずれも勉強してよかったと学生が感じていることが多かった。従来の現場実習では、リモートで行うことや友達の保育を見ること、子ども役を行うことは体験できない。仲間の保育に参加し、仲間の保育に対する保育者のコメントを間近で見

表2 勉強してよかったプログラム

目標	プログラム内容	特に、勉強してよかったと思うプログラムを3つ	件数
役割・機能	養護と教育の一体化の事例検討（討議）	養護と教育の一体化について事例を通してディスカッションしたこと	13
	気になる子について討議①-②	経験をもとにした「気になる子」を共有したこと	23
観察や関わりの視点	避難訓練（行事と日常の対応）について討議	避難訓練について考えたこと	4
	映像から記録をとる（朝の受け入れ等）	実際の保育園の映像を見て記録をとったこと	11
保育や子育て支援	感染症について調べ学習の成果発表	感染症について調べ学習をもとに話合ったこと	5
	子育て支援についてロールプレイ	保護者支援のロールプレイをしたこと	10
	自作の紙芝居披露①-②	オリジナルの紙芝居を作成したこと オリジナルの紙芝居を披露したこと	4 1
計画・実践	模擬保育実践①-⑧	リモートとはいえ模擬保育をしたこと（保育者として）	32
		友達の（模擬）保育に参観したこと	66
		現場の先生方に模擬保育のコメントをいただいたこと	40
		子役を何回もやってみたこと	39
		指導案や教材を作成したこと	20
倫理	模擬保育についての意見交換①-④		
	倫理について調べ学習の成果発表	保育士倫理綱領を具体的な場面におとして考えたこと	6
	人権について調べ学習の成果発表	人権についてゼミメンバーで話合ったこと	3
自己課題	模擬保育反省会①-②	現場の先生方からご講演いただいたこと（9/4最終日）	9
	模擬保育についてのまとめ		

ることは、モデリング・モニタリングの機会を与えることにつながったと考える。小泉・田爪(2005)は、保育者モデルを早く見つけモデリングすることが実習を乗り越える戦略であると述べている。今回の模擬保育は、プロとして働いている先輩保育者の保育を見る機会ではなかったが、仲間の保育を見ることで、等身大での気づきを得やすかったと考えた。Topping(2005)は、ピア・ラーニングの観点から仲間が学習過程で重要な役割をもつことを指摘しており、仲間をモデリングすることには大きな意味があると考えられた。

保育室の中の「気になる子」も、現場では学生自身の感覚をベースとしているが、ピア学習者がどのような子どもを「気になる」としているのかを相互に知ることで、複眼的に保育室内の子どもの様子を捉える視点をもつことになったと考えた。例えば同じ診断名がついていても、それぞれ行動上の問題は異なってくるなど、意見交換をすることで、同一ラベリングの「気になる子」でも複層的に理解することができ、更に保育者の関わり方の多様性も知ることができたと考えられる。

「養護と教育の一体化」の討議からは、子どもが安心・安全に過ごせる環境作り(養護)と子どもが主体的経験を通して育まれるもの(教育)について理解が深まったと考えられる。

「職業倫理」の「多様な業務や役割」や「職員間の連携」は現場実習の中でクラスに入り子どもの対応に追われる日々では実感しにくいと想像される。このことを踏まえると、朝の受け入れの映像や避難訓練の写真を通して学んだことには大きな意味があったと考える。

## プログラム作成に関する課題

今回は COVID-19により現場実習を中止し学内プログラムを講じた。受講する学生からは学びを得たという主観的な感覚を得ることができたが、そのプログラムの教育効果を検証しなければ、教育における PDCA のサイクルにはならない。プログラムの受講前における学生の学習目標に対する到達度とプログラム受講後の到達度を比較検証し、プログラムの質を考察していくことが今後の課題である。また、実習には事前・事後指導もあるため、その学びについても別報(小嶋・堀・金子・野口、2021)で検証していきたい。

## 引用文献

- 阿部アサミ(2016) 保育者養成校における実習に関する研究—模擬保育の意義に着目して— 白鷗大学教育学部論集、10、263-276.
- ベネッセ教育総合研究所(2020) 園の取り組み事例②まちのこども園代々木公園 これからの幼児教育2020Autumn、18-21.
- 髻櫛久美子・野崎真琴(2010) 保育現場における紙芝居の活用状況 名古屋柳城短期大学研究紀要、32、65-75.
- 郷間英肚・郷間安美子・川越奈津子(2007) 保育園に在籍している診断のついている障害児および診断はついていないが保育上困難を有する「気になる子ども」についての調査研究 京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」、23、19-29.

- 木内瑛大・佐橋勇紀 (2020) 新型コロナウイルス感染症による病院実習や就職活動への影響と新たな取り組み：医学生からの視点 医学教育、51(3)、356-357.
- 原井美佳・貝谷敏子 (2020) コロナウイルス感染症 COVID-19による緊急事態宣言下における遠隔会議システムを用いた看護学実習科目への挑戦 サービスロジーweb マガジン (2020-06-05)
- 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2017) 平成29年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究報告書 27.
- 小島千恵子・鬢櫛久美子・高瀬慎二 (2013) 紙芝居に関する保育者の意識と活用状況—保育者の保育経験年数との関係から— 名古屋柳城短期大学研究紀要、35、183-193.
- 小泉裕子・田爪宏二 (2005) 実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究—保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連— 鎌倉女子大学紀要、12、13-23.
- 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針 フレーベル館
- 厚生労働省 (2018) 平成30年4月27日の通知 <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000546183.pdf>
- 厚生労働省 (2020a) 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について (令和2年3月2日) <https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000602227.pdf>
- 厚生労働省 (2020b) 令和2年4月10日(金)の閣議後記者会見における加藤厚生労働大臣の発言について <https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000620637.pdf> 2020/10/18 最終閲覧
- 厚生労働省 (2020c) 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について (令和2年2月6日15日) <https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000640105.pdf>
- 丸山美和子 (2008) 「気になる子ども」の実態と保育者の問題意識—保育者へのアンケート調査より— 丸山美和子 (監修) 大阪保育研究所 (編) 保育現場に生かす「気になる子ども」の保育・保護者支援 かもがわ出版、45-73.
- 中田 (後藤) 範子・柳瀬洋美・渡邊眞理 (2014) 「共に育つ保育者養成」の探求 2—保育実習Ⅱ (保育所実習) に向けた保育実習指導のあり方— 東京家政学院大学、54、9-23.
- 奥恵・浅香勉・八田清果・音田忠男 (2020) 保育実習生の課題を踏まえた実習指導のあり方 小池学園研究紀要、18、15-24.
- 小嶋玲子・堀由里・金子晃之・野口啓子 (2021) 保育実習Ⅱ事後指導における学生の学び—他者評価と自己評価の相違点から学ぶ— 桜花学園大学保育学部研究紀要、23、印刷中
- 榊原尉津子・小川真由子・杉山佳菜子 (2018) 保育実習の振り返りと自己評価 (2)—現場で求められる保育者の資質能力向上を考える— 鈴鹿大学・鈴鹿短期大学部紀要 人文科学・社会科学編、1、171-183.
- 竹之下典祥・馬見塚珠生 (2016) 学生の地域子育て支援ひろば実習から得られた保育士養成の課題 盛岡大学紀要、33、43-52.
- Topping, K. J. (2005). Trends in peer learning. *Educational Psychology*, 25, 631-645.
- 田爪宏二・小泉裕子 (2006) 保育者志望学生の「保育者アイデンティティ」確立に関する検討：模擬保育の実践を通して 鎌倉女子大学研究紀要、13、27-38.
- 全国保育士養成協議会 (2018) 保育実習指導のミニマムスタンダード Ver. 2 中央法規

## 謝辞

コメンテーターとして模擬保育に協力いただいた現・元保育者の17名に感謝申し上げます。慣れないリモートでの模擬保育の参観に快く応じていただき、学生には細やかな指導をしていただきました。

(受理日 2021年1月7日)